

<11.23 北海道エスペラント連盟総会報告> ルーティン化した活動から機動的で創造的な活動へ

2020年11月23日札幌のエルプラザで開催された北海道エスペラント連盟総会は会場参加6名、リモート参加3名であった。コロナ流行と多くの連盟員の高齢化により参加者は少なかったが、議案書の大部分は事前に郵送しており、委任状及び意見書の受付も周知した。

ここで今回の総会の大きな特徴と成果を報告する。

北海道エスペラント大会は、年一回開催から、適宜の開催へ

北海道エスペラント大会は、北海道連盟の赤字財政の大きな原因のひとつとなっており、それも毎年決まった中心メンバーの献身的な活動によって支えられてきた。またこの大会で新しくエスペラント運動に参加する市民は少なく、参加しても長く続かない場合が多かった。

今年は、コロナ流行のため北海道大会を中止としたが、今後は定期開催をやめて、大会開催を求める連盟員と、かつ大会開催のために働ける連盟員が共に存在するときに、北海道エスペラント大会を開催することとした。年一回の連盟総会は従来通り開催する。

リモート化する運営会議

運営委員会(委員会)は、当面リモートで行い、リモート環境にない者が会議に参加する場合はロンデタージョで集団でリモート参加できるようにする。また運営委員(委員)でパソコンを所有していない者には、連盟からリモートに対応したスペックのパソコンを貸与することにした。

運営委員の過半数が20代・30代前半の青年エスペランチスト

前運営委員(委員)に20代の若者は2名いたが、今期運営委員には20代・30代前半が5名となり、会計監査をいれると6名の青年たちが連盟運営にたずさわることになり、全運営委員の50%を超えた。青年部も設置され、10名を超える36歳未満の青年会員で、日本青年エスペラント連絡会や国内外の青年エスペランチストと連絡を取りながら活動している。

この比較的多数の青年エスペランチストを生み出した理由は以下の3点であると考えられる。一つは、少なくない青年エスペランチストがなんらかの社会運動に参加しており、常に新しい青年とのつながりを持っている。第2に、大島義夫著、新エスペラント講座入門編を使用した10～20時間ほどの入門速習体制が確立している。この教科書は1968年発行で日本共産党員が作ったものだ。ジェンダー、青年労働者の運動、エスペラント運動などに関して時代と当時の共産党の活動などによるバイアスがかかっていることなどを指摘しながら読むと、青年にとって興味深いものになる。第3に、北海道には2019年に逝去した故阿部映子同志が設立した北海道の青年エスペランチスト向けの、私設の奨学金制度がある。苦学生でなくとも、ごく普通の学生・青年労働者の多くが、学費の支払いや高利の官制奨学金の返済に困っている。阿部映子奨学金はエスペラントの学習と北海道連盟の運営に参加することを条件に、国立大学の年学費を最大限とする給付金額で、必要とする資金を無償で奨学金として交付する。結果、学習や活動に奨学生が積極的に参加している。

ちなみに女性の運営委員は4名、44%である。

中堅エスペランチストの不足

20代・30代以外の運営委員は全て60代70代のエスペランチストであり、40代50代の中堅エスペランチストが全く運営体制に存在していない。これは10年から30年にわたる活動のルーティン化がもたらした結果であり、数少ない新規加入者とまた定着率の低さと相まって、新規加入者が同世代の仲間とのコミュニティをエスペラント界に見出せずに去っていったのである。この中堅世代の欠落は、エスペラントの一般的能力の向上とその対象領域の拡張において少なくない困難を、若い学習者にもたらしている。特に若者から老人まで連盟全体でエスペラントの会話能力の獲得が課題となっている。

中堅の不足を補うには、沼津エスペラント会の通信講座の受講や海外の青年エスペランチストとのリモートや連盟機関誌による交流など、工夫を必要とする。

熱心で安定した地方会活動

現在、連盟には札幌エスペラント会と苫小牧エスペラント会の二つの地方会が活動を行っており、高齢者が中心となって熱心で安定した学習活動を行っている。高齢者の連盟への要求をくみ取るとともに、若者との交流の機会も作っていかなければならない。

地理的孤立の克服

北海道は二重の意味で地理的に孤立している。ひとつは日本の最北端だということである。沖縄・大阪はもちろん、東京ですら特別な用がなければいけない土地であり、わずか数十キロほど南にある下北など青森県に行くこともない。そして多くの日本人の感覚と同様に、北海道のさらに北に住むロシア領の人々のことは、何万キロも離れたハワイほどにもあるいはニューヨークほどにも、考えたことはない。北海道人にとっては最も近い外国はソウルである。

二つには、北海道の人口の5分の2は札幌圏にあり、地方中核都市函館、旭川、帯広、釧路、北見の各都市に年に一度も訪問したことがない札幌人が大多数である。日帰りが困難な中核都市への札幌からの宣伝・学習活動はいかに困難なことか。広大な北海道での活動は、冬でなくとも車を使った移動費だけでもかなりのものになる。

サハリン(煩雑な手続きと多額の費用がかかる)、韓国、東北、東京、大阪、九州、沖縄などへの「海外」遠征、北海道内中核都市への遠征、道内キャンプ地や低価格リゾートでの合宿、札幌での無料宿泊合宿・学習会などの経験を積みながら効果的な宣伝・学習を模索していかなければならない。そのために北海道エスペラント運動発展基金から毎年予備費を計上する。この基金は故阿部映子同志からの寄付とこれまでの先輩たちの財政努力による資金である。リモートによる会議や飲み会は、これらの遠征や合宿の準備と組み合わせるなら、より効果的になる。連盟の機関誌活動や他のエスペラント組織の機関誌への記事の投稿など、また連盟のネット活動なども有効となるであろう。

アイヌ語ペンクラブとの機関誌交換協定

今回の連盟総会に間に合うように締結された、「アイヌ語ペンクラブと北海道エスペラント連盟による北海道における言語の権利を守り、発展させるための協定書」は機関誌交換協定であるが、北海道連盟がはじめてアイヌ民族組織と締結した協定であり、北海道連盟の少数言語政策の上でも画期的なものである。連盟委員長が署名し、連盟総会で批准された。

北海道エスペラント連盟副委員長 宮沢直人